お彼岸の成り立ち

お彼岸がいつの時代に始まった行事なのか定かではありませんが、平安時代中期に書かれた『源氏物語・行幸の巻（文献初出一〇〇一年）』に「彼岸の始めにて、いとよき日なりけり」と記されており、また、九五四年から二十年間を綴った「蜻蛉日記」にも彼岸の記述があることから、相当の昔からこの行事が営まれていたことがわかります。

私たち日本人は農耕民族でした。四季折々の季節の移り変わりのなかで、自然に親しみ、自然とともに生活し、その恵みをもたらしてくれる日天（太陽）や月天（月）を祀り、感謝の心を養ってきました。

自然の恵みに感謝し、先祖の恵みに感謝し、今ある命の尊さに手を合わせてきた敬虔な民族でした。お彼岸の成立は、この農耕儀礼が仏教と結びつくことによって、現在のような形式になってきたというのが定説のようです。

彼岸花によせて

秋の風が立つと、土手や墓地の片隅に彼岸花が赤い花を咲かせます。別名の曼珠沙華は「天上界に咲く花」という意味です。

彼岸花は、花と葉を同時に見ることができません。花が枯れた後で葉が伸び始め、ほかの植物が枯れた冬に緑の葉でたっぷり光を浴びます。

こうして栄養をたくわえると夏の眠りに入り、開花の季節をじっと待ちます。

秋の彼岸を迎えるころ、彼岸花は球根の栄養を使いきるかのように、その茎をぐんぐん伸ばします。秋の空に向かって直立する凛とした姿には、崇高なよそおいすらただようほどです。

仏教では赤い色に、他者を思いやる「慈悲」、あるいは「精進」の意味をあてます。

お墓まいりに訪れた私たちを、やさしく迎える真っ赤な彼岸花。慈悲と精進の「ほとけ色」に、我がこころを染めてみてはいかがでしょうか。

第八回　彼岸花まつり

境内裏山に群生する彼岸花の開花時期に合わせ、各種催事を行います。お誘い合わせの上、ご来山ください。

●日時

令和元年九月二十一日（土）
二十二日（日）
―二十三日（月）秋分の日―

予定催事

●禅僧墨蹟展
●限定ご朱印
●ステンドグラス作品展
●東北熊本物産品展
●婦人服販売
●ケータリングカー出店

※開催期間中は、誠に申し訳ございませんが、本堂及び客殿を使用しての法事、法要等をお受けする事が出来ません。予めご了承ください。

「茶寿」は何歳？仏教とは関係あるの？

数え六十一歳になりますと「還暦」といわれますが、これは六十年で再び生まれた年の干支に還るという意で、「本卦還」などともいわれます。

「喜寿」は七十七歳のことです。これは喜の字の草体「㐂」が七十七と読まれることから、七十七歳の祝いで「喜寿」というようになりました。

「米寿」は八十八歳のこと。米という文字を分解すると八十八になることからきています。

さて「白寿」は何歳のことでしょう？　九十九歳のことなんです。なぜかというと、「百」の字から一を取れば「白」になることから　白＝九十九というわけです。

さらに長寿で、百八歳を迎えると「茶寿」と呼ぶことをご存じでしたか。ちょっと茶という字を分解してみましょう。

この百八という数字は仏教で教える百八煩悩と同じ数ですね。

われわれも長寿百八歳ともなれば、煩悩にまどわされることもなくなり「茶寿、まことにおめでとうございます！」ということになるのですね。どうぞ茶寿を迎えるまで、長生きなさってください。

茶
艹＝20
廾＝80
八＝8
計108

冥途の旅

人は死んで、すぐに地獄とか極楽へ行くわけではない。行方が定まるまで長い旅がはじまる。

人が亡くなって来世に生まれ変る中陰期間（四十九日）の間、七日ごとの供養が営まれる。一方、行き先の定まらない霊は七日ごとに裁判を受けることになる。

十三仏は慈悲の仏さま

七日ごとの裁きに法事を営むのは故人の罪を軽減しようという願いに他なりません。

冥途の裁判官は恐い存在のように思われますが、そうではありません。**冥途の王はもともと仏教の十三仏（本地の仏）**が、王の姿に身を変えて現れたものだからです。

十三仏は、冥界で迷う死者を救う慈悲の仏であるのです。中陰期間の法事が、死者にとっては大きな援軍になるのです。

四十九日を過ぎて地獄におちても、そのあと三十三回忌までの各忌に、それぞれの仏さまが裁判官として現れて再審し、成仏させてくれるのです。

ちなみに王と十三仏の関係は以下のとおりです。

- **初七日（秦広王＝不動明王）**
- **二七日（初江王＝釈迦如来）**
- **三七日（宋帝王＝文殊菩薩）**
- **四七日（五官王＝普賢菩薩）**
- **五七日（閻魔王＝地蔵菩薩）**
- **六七日（変成王＝弥勒菩薩）**
- **七七日（太山王＝薬師如来）**
- **百か日（平等王＝観世音菩薩）**
- **一周忌（都市王＝勢至菩薩）**
- **三回忌（転輪王＝阿弥陀如来）**
- **七回忌（阿閦如来）**
- **十三回忌（大日如来）**
- **三十三回忌（虚空蔵菩薩）**

十三仏の思想は中国の十王信仰から生まれたもので、忌日、年忌の法要で、故人を救ってくれるありがたい仏さまです。

●絵で見る禅の修行生活　雲水日記⑲

※雲水（うんすい）修行僧のこと。行雲流水のように淡々として一処に止住せず、正師を求めて遍歴する意よりくる。

粥座

朝は目玉の浮ぶ粥

飯台看の打ち鳴らす雲版を合図に、大衆は直日に先導されて食堂に向かう。玄関と本堂の間で両側畳敷、中央一間半くらいの板の間だ。着座すると食事のためのいくつものお経や偈が唱えられ、各自持鉢を開いて飯台看から如法に食物を受ける。生飯と称する七粒ほどの飯粒をつまみ出して餓鬼に供え、看頭の柝木一声でいっせいに合掌してはじめて箸をとる。

通称「天井粥」、目玉もヒゲヅラも映る薄い粥と、異臭を放つ古沢庵だけがすべての、涙ぐましいまでに慎ましい粗食。そして「三黙堂」の名の示すとおり、粥をすする音も、漬物を噛む音も、箸を置く音もいっさいが封じられたところ。やがてこうした厳粛な雰囲気の中で食事が終わると、注がれた一杯の茶で洗鉢し、フキンで拭って特鉢をしまいこむ。この一糸乱れぬ厳然とした食事作法はまた、仏道修行の一つであり、この仏飯が一日の求道の糧である。こうした飯台座においてこそ、最低の生活に最高の感謝という僧堂生活の真髄がうかがえよう。

恩林寺ホームページ

恩林寺に関する情報が満載です。動画や写真をまじえ、過去の行事や出来事、案内事項など常に新しい情報を発信して居ります。是非ご覧になって見てください。

URL http://www.onrinji.net/